



Title	発話時の「気づき明確化支援」が発話に与える影響：中級日本語学習者での実践を例に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	佐藤, 淳子
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第15807号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92051
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Sato_Junko_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：佐藤 淳子

審査委員	主査	准教授	平 田 未 季
	副査	特任教授	河 合 靖
	副査	教授（西南学院大学）	山 田 智 久

学位論文題名

発話時の「気づき明確化支援」が発話に与える影響

—中級日本語学習者での実践を例に—

本研究は、発話のなかで言いたいことを目標言語で言えない時に感じる「気づき」を研究対象とした、日本語教育における教室内第二言語習得研究である。当該研究分野では、認知プロセスとしての第二言語習得モデルにおいて、目標言語のインプットに対する気づきを最初のステップに位置づけて重要視している。しかし、これまではインプットに対する気づきを中心に研究が進められてきており、アウトプットにおける気づきについてはまだ研究が限定的であると著者は指摘する。本研究では、気づきを「話者の伝えたい意味生成を含む発話の際に起こる、知識の穴やギャップに関する焦点的注意」と定義し、日本語の特質と記憶研究の知見を整理して既存のスピーチ・プロダクション・モデルに検討を加え、さらに臨床心理学で用いられている記憶分類を援用した上で、2つの下位研究を実施している。

研究1では、再生刺激法を用いて教室内言語活動における気づきのデータを収集し、質的内容分析の手法を用いて分析した。その結果、語彙に関する気づきが多いこと、近似記憶として想起される気づきは少ないことが示された。研究2では、教育的介入を行った結果として明確化された気づきが、発話パフォーマンスに与える影響を検討した。具体的には、学習者は与えられた課題について意見を述べる学習活動を行い、1回目の活動のあと、言おうとして言えなかった語彙を調べる時間が与えられ、この教育介入（気づき明確化支援）による気づきが、2回目以降の学習活動において発話の流暢さと語彙的複雑さに変化をもたらすかどうかを検討した。実験群では教育介入の事前、事後、およびその2日後の3回、統制群では教育介入を行わずに同じく3回言語活動を実施した。その結果、実験群では事後の発話で流暢さが損なわれる場合も見られたが、3回目の発話では流暢さも語彙的複雑さも向上したと著者は主張する。

口頭試問は2024年1月5日14時30分から約1時間30分にわたって行われた。まず、博士論文提出者が約25分間論文の内容について発表を行った。次に、審査委員との間で研究の意義、新規性、方法論などの観点から約35分間の質疑応答が行われた。その後、約30分間審査委員のみで本論文の審査を行った。

口頭試問では、教育介入における学習者の自律性に対する検討、語彙に焦点を当てたことの妥当性と他の言語習得分野、例えば語用論的側面の気づきと提示されたスピーチ・プロダクション・モデルとの整合性、教育介入にライティングの要素を加味したことによる影響、教師の属性による研究成果の一般化への影響、本研究で提示した改訂スピーチ・プロダクション・モデルについて今後さらに検証を深めていく方法、流暢さおよび語彙的複雑さの指標の検討過程などの点について質疑応答が行われた。著者からは真摯かつ誠実な態度で回答がなされ、その内容も適切で妥当であった。質疑応答を通して、著者が本研究を学術的にどのように位置づけ、教育実践にどのように還元していくべきかに対する応用言語学者としての真摯な情熱が感じられ、博士論文口頭試問として高い水準であったと判断される。

質疑応答の後、著者本人及び参加者が退出し、審査委員のみによる審査を実施した。審査委員は、次の3点で本論文を高く評価し、その意義を認めると判断した。まず、第一に、本研究でアウトプットに焦点を当てて第二言語習得過程における気づきの働きを検討したことは、新規性、独自性がある。また、現場の教育実践者の直観とも符合して適切な方向性を持つと感じられ、理論的な第二言語習得モデルを教育実践と結びつけた融合的研究としての価値は高いと判断される。第二に、具体化が難しい抽象的な概念の気づきを、研究デザインの工夫により可視化している点は、研究方法の上で評価に値する。また、研究に関連する重要な概念を段階的かつ丁寧に検討し、記述している。第三に、研究において気づきの可視化が難しいという事情は教育実践でも同様であり、本研究で方法論的な可能性が示されたことは、教育実践に対する影響も大きいと判断する。今後、意識的にアウトプット時の気づきを言語習得の促進に利用する授業デザインが広がると期待される。

一方、問題点としては、研究参加者や教育介入が量的にも質的にも限定的であるので一般化に難があること、気づきに影響を与える要因をどう統制していくかが今後の課題であること、意見述べのテーマの難易度による発話パフォーマンスへの影響についてはさらに検討が必要であることなどが挙げられる。このような問題は残されているものの、第二言語習得研究に大きな指針と影響を与える研究であることは明らかであり、本論文は学術的にも社会的にも高い意義を持つ。よって、審査委員会では本論文を、博士（学術）の学位を授与される資格があるものと判断した。